



2012.1.25

No.170

編集・発行人 樋口みな子

E-mail [minginga@agate.plala.or.jp](mailto:minginga@agate.plala.or.jp)  
<http://url-c.com/66401>

郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)

## 寒中お見舞い申し上げます

東日本大震災から10ヶ月。被災された方たちは暖かいお正月を迎えることが出来たでしょうか？3.11をきっかけに、私も何でもない平凡な日常の大切さをかみしめた日々でした。

昨年4月に父が亡くなり、新年のご挨拶を控えましたが読者からたくさんの年賀状を頂きました。さまざまな近況を知ることができ嬉しかったです。いつもだと2日ぐらいから山歩きを始めるのですが、今年は家族揃って静かな新年を迎えました。元旦の朝、早起きして野幌森林公園近くまで歩き、初日の出が昇ってくるのを待ちました。だんだん、空がオレンジ色に染まり



1.1 野幌森林公園近くの初日の出

厳かに太陽が昇ってきました。まだ薄暗い中青白い雪にオレンジの太陽が反射して、希望の光に見えました。穏やかないい年であって欲しいと心の中で祈りました。1年の始まり、いいスタートを切ることができました。

昨年11月に泊原発の廃炉をめざす会の事務局長を引き受けました。私は理論的でもないし、果敢に突き進むには若くもなく、ふさわしいとは思ってはいませんが、運動を進めていく中で、きっと適任者が見つかると思っています。家族は原発が廃炉になるといいねと応援してくれています。今までは市民運動はほどほどにして欲しいという夫でしたが、福島で、人



1.8 阿部山頂上で（撮影・岡田秀二さん）

に及ぼす被害の大きさに理科を教える立場としても反対したいと話しています。山登りが私の生活の中心にありましたが、しばらくは、廃炉をめざす会の活動が最優先です。但し、長い活動を支えるには体力が必要ですので、山登りは続けたいと思っています。今までの山登りとは逆の発想ですが、頭を切り換えると、事務仕事などのストレスが解消されて元気になれることを発見しました。

深々とした新雪の野幌森林公園は夏とはまた違った風情があり、空の青さが目にしみました。（下左写真）



今年の初登りは山仲間11人での阿部山（703m）。手稲の平和霊園から、スノーシューで歩きました。ラッセルは交代で。息が切れましたが、楽しかったです。みんなの笑顔が物語っていますね。雪崩講習会が北村から始まりました。（記事は2ページに掲載）

今年もご愛読よろしくお願い致します。



1.15 北村（北の生活館）でイグルー作り（撮影・松浦孝之さん）

# 雪崩講習会が始まりました

今年度の雪崩講習会が昨年の11月から始まりました。2011年12月17日～18日の2日間、旭岳で講師養成クラス研修会が行われ講師も含む26人が参加しました。

私は講師養成2年目。いよいよ卒業の年になります。教える立場になることの難しさ。まずは学んだことが自分の血となり、肉となるには一朝一夕では出来ません。生徒にわかりやすく説明出来ることが私の課題です。

講師研修会では、コンパニオンレスキュー（同伴者らによる救助）につ



いて、夜の座学、翌日は実地講習を行いました。従来のレスキューから、一歩踏み込み、一次救急を取り入れ安全な状態で組織レスキューに引き渡すことをめざした実習でした。年々、高度な技術を学び、ついて行くのが大変です。でも医療現場にいたので救急救命はより身近で大事な学びになりました。

年が明けて1月14～15日は岩見沢市北村の「北の生活館」での講習会。登山歴45年以上になる小笠原さんのお話。雪崩を回避することが最も大事と話されたのが印象に残りました。雪崩の知識があれば、回避できた事例をたくさん見てきた人の実践には学ぶものがありました。雪の研究者である秋田谷先生

の講演を聞いて日頃の気象観察から、雪崩の原因になる弱層を見つけることの大事さも学びました。

2人が埋まっているという想定でのビーコン捜索やコンパニオンレスキューはチームでリーダーを決め、それぞれに役割を持ち、声を掛け合いながら訓練をしました。

遭難者を雪崩の現場から救い出すには、一刻の猶予も許されません。15分以内に呼吸の確保を行うには、シャベリングを効率的に行う必要があります、V字ベルトコンベア法で掘り起こす実習では汗をかくほどでした。

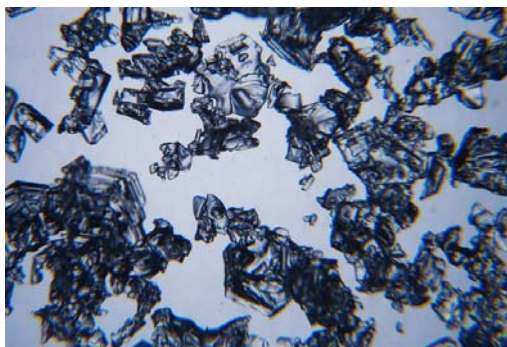
生活館での講習会は、楽しさもいっぱい。スノーマウンテンを作ったり、前日に雪踏みをして翌日、ヘッドランプをつけてのイグルー作り（1面の写真）と大人の雪遊びあり、秋田谷先生手製の顕微鏡で、雪の結晶の観察会と盛りだくさんでした。

雪崩研究会のメーリングリストで、講師養成講座のEさんの補修をするという呼びかけがあり、21日、地下鉄で真駒内まで行き、廃止になった旧真駒内スキー場の小高い山の周辺で講習を受けました。厳しい冬山に登っているEさんが講師になり、山に入っていくときにしなければならない一連のテストを説明をしながら

行いました。私は生徒です。M講師が足りなかった説明、良かった点などを講評しとても勉強になりました。15度程度の斜面で、雪崩の心配のない場所でしたが、南斜面で日中は日が差し、夜になって冷え込み、積雪20センチから35センチの所にこしもざらめが混じていました。積雪断面観察の意味が分からず私にとっては難解でしたが、シャベルコンプレッションテストなどのピットテストとの相関性が理解できました。

21日は中山峠での雪崩講習会。初心者コースで講師補助を勤めました。ビーコン捜索の方法や、雪崩の危険判断をするために行うシャベルコンプレッションテストや円柱テスト、スキージャンプテストの説明は出来るようになりました。

雪崩講習を受けるようになってから、何気なく冬山に入っていくことが怖いと思うようになりました。山の技術が未熟な人ほど、雪崩知識を身につけることが必要です。講師になる自信は全くありませんが、少しでも多くの登山者に雪崩講習の大切さを伝えていけたらと思います。話すのは苦手ですが、銀河通信の読者



しもざらめの結晶 photo by minako

には伝える義務があると思っています。登山を愛する人たちの誰もが雪崩の知識と技術を身につけていただきたいと願っています。

私自身も、救急救命講座を消防署か日赤で受けたいと思います。北海道雪崩研究会のHPは<http://homepage3.nifty.com/hokkaido-nadare/> 是非ご覧下さい。

上からコンパニオン・レスキュー、シャベリング、プローブヒットからシャベリングの実習(1.15 北村で)  
撮影・小山健二さん

### 3.11を忘れない ー2011年を振り返って

東日本大震災が起こった3.11。2011年は我が家にとってもさまざまな事があった年でした。家族新聞から出発した銀河通信ですが、個人通信に編集方針を変えてからは、家族が登場することがなくなりました。でも我が家もそれぞれに受け止めた3.11でした。

その日、手帳を確認すると、小野有五さんの北大定年記念講演会の準備で打ち合わせをしたことになっています。打ち合わせを終え帰ろうと札幌駅周辺に私はいました。大きな揺れは感じましたが、まさか、東北で津波によって、たくさんの人たちが犠牲になったことは知るよしもありませんでした。小野有五さんらが中心になって、大震災の支援ネットワークむすびばをすぐに立ち上げたのです。3.18の最終講義は無事に開



ハープとオカリナの音色が温かでした



リビングを占拠した天体望遠鏡

かれ、その場でカンパの訴えがありました。400人が聴き入った最終講義は感動で涙があふれました。

3月19日、私は京都に飛びました。20日の甥の結婚式に北海道から親族代表で出席。私の妹夫婦の次男ですが、大学生になった頃に会ったきりでした。倫彦君が鹿児島大学大学院のゼミで学んでいた時、音楽指導で京都から招かれたのが秀子さん。二人は意気投合したようです。音楽が結んだ縁でした。二人のハープとオカリナの演奏「千と千尋の神隠し」が息もぴったり合い温かく、門出にふさわしく素敵でした。（右上写真）教会での式は「アメージング・ブルース」が流れ、東日本大震災で亡くなった方たちへの悼む気持ちが伝わりました。4月19日、銀河通信166号の発送を終えほっとして眠りにつきました。その翌日の20日、電話が激しく鳴るので驚いて出ると、病院から父の死を知らされました。88歳の生涯でした。孫の結婚式の写真を、嬉しそうに見つめていた父。私の通信の発送まで待ってくれたのだと親のありがたみがいじみじみとわかり、「ありがとうございました」と胸でつぶやきました。長い闘病生活でしたが今は天国で親兄弟と再会し、福島弁で語り合っているのでしょうか？

夫、澄生の間接リウマチが悪化。3年ぐらい前から進行を食い止める最新の医療を受けていましたが左肩が上がらなくなり、人工関節の手術を5月に受けました。58歳の誕生日を病院で迎えました。その後の頑張りには頭が下がりました。のんびりマイペースの夫が、毎日朝晩のリハビリを仕事の前後に自宅でやり続けたのです。ものすごく痛いらしいです。今もリハビリを続けています。高額医療費が家計を圧迫していますが（2ヶ月後に10万だけ戻ってきます）夫はめげていません。前向きになり、研究会にも積極的に行くし、天体観測も何年ぶりかで復活。晴れた夜は星の観



第二回R野川同好会2011年(平成23)8月21日 湯島川



測を楽しんでいます。写真の天体望遠鏡がお気に入りです。父に似たマイペースの息子も進路を真剣に？考え初めています。今年は学生生活にピリオドを打つ予定です。

長い介護（といっても病院の往復だけでしたが）から解放されたみな子は、7月に秋田の友人と鳥海山に登りました。所属山岳会の沢研修は湯ノ沢、漁川からの漁岳は仲間と庄巻の大滝やなめ滝を満喫しました。

日本山岳会では昨年、オホーツク分水嶺踏査を再開しました。36人の会員が、藻琴山から小清水峠まで歩きました。藪漕ぎが楽しかったです。藪を超えると、屈斜路が一望でき短い距離でしたがそれなりに達成感がありました。今年の

3月から本格的な踏査が始まります。

泊原発の廃炉をめざす会の発足集会が7月にありました。ほんのボランティアのつもりが、人材不足のため事務局長を引き受けました。北海道高山植物保護ネットの事務局長も経験していたので大丈夫かなと思ったのですが、この煩雑さは想像を超えていました。提訴までも大変だったのですが、今のほうが精神的にはきついです。なんとか乗り越えて脱原発の運動を大きくしていきたいと



2011/10/01



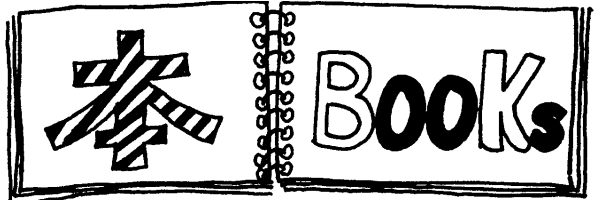
思います。賛同人として廃炉の会を支えて頂けますようお願い致します。泊原発の廃炉をめざす会郵便振替 02790-1-100850 1口1000円です。山の写真3枚は京極絢一さん撮影 右写真は市川利美さん撮影



私が泊原発の廃炉の会の活動をしていることを知って、30年来の友人から、機関誌「広島ジャーナリスト」が送られてきました。

日本ジャーナリスト会議広島支部は広島

を拠点に活動する報道各社の記者らが1967年に結成。同誌をを発刊しましたが、80年代前半で発行が途絶えていました。30年近い休止期間を経て、自由な言論の場の再生をという声が高まり、2010年7月に機関誌として復刊したのが本書です。その発行人・支



部共同代表が友人の沢田正さん。送ってくれた本人です。いい仕事をしていますね。

12月発行の第7号は「基地の町と戦争はいま」「原発の闇が暴かれる」というタイトルの特集記事です。福島・飯舘村から一家で広島市に避難してきた青木達也さんは、講演会で、避難までの3ヶ月間の生々しい体験を報告しています。安全を連発した御用学者。行政は住民の安全よりも行政の都合や経済的な線引きで避難区域を設定しているため、大勢の子供達たちが犠牲になっている。緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）は高濃度の汚染を確認しながら、情報は公開されなかった事実等。青木さんは、飯舘村村民の命は国から見捨てられたと告発しています。福島駅から乗り換える東京駅まで、見える景色全てが放射能で汚染されているのだと思い、あらためて膨大な量の放射能が放出されたことを実感。広島に向かい、離れるにつれ、原発から遠ざかる安心感が出てきたと語っています。改めて目には見えず、臭いもない原発の怖さが胸に迫りました。

40年以上続く伊方原発反対運動。その経緯を住民側から克明に報道してきた地域新聞がありました。タイトルは「原発権力にひるまず」B4判2千部、30年の闘い。南海日日新聞の社主記者だった齊間満さん（故人）の仕事を妻の淳子さんと、齊間さんの同僚、近藤誠さんが当時を振り返っています。南海日日新聞は、市民の立場や民主主義、人権を守ることが大切であるという視点から反原発を貫いたのです。今の新聞、テレビが自由な言論を保証しているだろうかと考えられました。沖縄問題、広島を訪れたオバマ大統領等、読み応えのある一冊です。B5判120ページ。年4回刊。年間送料込み2500円。問い合わせは日本ジャーナリスト会議広島支部 電話082-231-3005 メール hiro9@opal.plala.or.jp

## 幻影の書

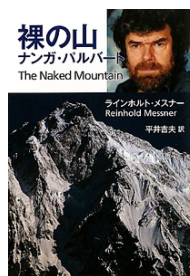
ポール・オースター著 柴田元幸訳 新潮社2300円＋税

大学教師のジンマーは飛行機事故で妻と二人の子どもを亡くしてしまい、人生に絶望していました。ある日、喜劇映画を偶然見て傷心が癒され、笑っている自分を発見します。そこからの展開がものすごく面白い。映画の主演ヘクターに関心を持ち、彼が残した12本の映画を探して欧米を旅し、ヘクターの作品について本まで出版します。謎の失踪をしたヘクターの人生と、ジンマーの人生が映画のワンシーンのように錯綜します。その描写の素晴らしいこと圧巻です。描写する言葉が映像的というのでしょうか？



ヘクターの妻に出した手紙の返事には「ヘクターは生きている。ジンマーに会いたがっていると書かれていました。ヘクター達とニューメキシコの農場で暮らしているアルマは、ジンマーをヘクターに合わせるために車を走らせませす。ヘクターに引き寄せられた二人はたちまち恋に落ちるのです。道中、アルマが語るヘクターの半生記は波瀾万丈。頭が良く、ハンサムだったヘクターは女性に持てました。そこに落とし穴があることは、読者には見えるのですが、ヘクターは気づいていないようです。ある事件からヘクターの人生は暗転します。話の展開が重層的で、次はどうなるの？という興味でページをめくりました。ヘクターをめぐる何人もの女性の心の機微が実に良く書き込まれているのが面白く、ぐいぐい引き込まれました。

本の中には映画のシーンも出てきます。ヘクターの妻フリーダは、死の床にあるヘクターの作品は全て焼き払ってと遺言します。映画でも再現されるのですから、重層的です。ジンマーの目には、その作品群こそが実在し、それを作ったヘクターの人生は幻に映ったようです。アルマとの出会いのシーンも意表をつくものだったし、すごく面白かったです。久しぶりに小説らしい小説を読みました。ヘクターの映画に救われて、新たな人生を歩み始めるジンマーもまた良し。映画化されたら是非観たいです。



## 裸の山 ナンガ・パルバート

ラインホルト・メスナー著 平井吉夫訳 山と溪谷社 1800円＋税

著者のラインホルト・メスナーは1944年にオーストリアの南チロル地方で生まれました。1969年にはアイガー北壁を当時の世界最短記録で登頂し、1970年から1886年にかけて酸素マスクなしで世界にある8000m峰14座を登頂したクライマーとして有名です。その記録「生きた、還った 8000m峰14座完登」は私の愛読書です。

1970年ラインホルトとギュンター兄弟は、標高差4500mのルパール壁の初登頂を果たしますが、ギュンターが高山病になり、ディアミール斜面を下降せざるを得なくなります。下山途中で、ギュンターを見失いラインホルトは必死に弟を捜しますが、雪崩の下になって探し出せません。「ギュンター！」と叫ぶ声が聞こえてくるようでした。死と隣り合わせの状況で気が狂ったような体験をしながら下山します。その描写が圧巻です。ラインホルトは当事者の目と、傍観者の目を交錯させながら綴っています。

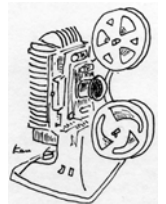
この悲劇の後、登頂と下山の事実認識を巡って、遠征隊長のヘルリコフファーと対立。訴訟にまで発展しラインホルトは敗訴します。ヘルリコフファーは1943年にナンガ・パルバートで遭難死したウイリー。メルクルの義弟で「ドイツ人にとって怨念の山ナンガパルバート」の全部を征服したいという復讐心に燃えた偏執狂的な執念にとりつかれた人でした。弟の死で打ちのめされているのに、高所登山の経験の欠如した隊長にその後も苦しめられることになるのですから、ラインホルトに荷担したくなります。30年たっても記憶は鮮明で、真実を語っているのは間違いのないと思います。絶望を繰り返し体験し、書き記し、苦しむ理由はないと感じてから、やっとあの悲劇と向き合えるようになったと、本書の執筆に至った心の変化を書いています。どんな状況にも対応できるようにトレーニングを積み、精神的にも鍛え、冷静な判断力等。勇気づけられる一冊でした。



## ペーパー・バード 幸せは翼にのって

スペイン エミリア・アラゴン監督

1930年代のスペイン・マドリード。内戦で妻と息子を失った喜劇役者のホルヘは相方のエンリケ、身よりのない少年ミゲルとの共同生活を始めます。この3人が疑似家族として



絆を深めていきます。監督はサーカス・アーティストでもあるエミリア・アラゴン。

監督自身が作曲したというニスたるジーあふれる音楽をバックに、芸人たちが歌や踊り、そして笑いで観客たちの心に灯をともしていきます。そんな中で、郡はホルヘに反体制派の容疑をかけます。ホルヘは3人でブエノスアイレスへと脱出する決意をします。ホルヘを父のように慕い、必死に芸を覚えようとするミゲル。ミゲルの存在が、生きる希望をなくしていたホルヘの心の傷を癒していたのでした。ラスト10分はサスペンス。どうか生き延びてと祈るような気持ちでスクリーンを見つめました。

最後に老芸人が観客に語りかけるシーン。内戦を生き抜いた深い悲しみが伝わってきて、もしかしてミゲルなのだろうかと思いました。その老人を演じたのは監督の父親であり、国民的なサーカス芸人のミリキ・アラゴンだそうです。家族でなくても心を通わせ、かけがえのない絆で生きる喜びにかえることが出来るんだとしみじみと胸を打ちました。

## ミツバチの羽音と地球の回転

鎌仲ひとみ監督



瀬戸内海に浮かぶ山口県祝島。その真正面にある田ノ浦で中部電力による上関原発の建設計画が持ち上がりました。以来28年間、漁師やおばあちゃんたちが一貫して建設に反対して来ましたが、上関原発に向き合う島民と、スウェーデンで持続可能な社会にするための取り組みを行う人々の両面から現代のエネルギー問題を描き出したドキュメンタリーです。

鎌仲ひとみ監督は「ヒバクシャ 世界の終わりに」や「六ヶ所村ラブソディ」を制作した人です。

島では海藻や鯛をとり、無農薬のピワを栽培して暮らしています。決して豊かとはいえないけれど、彼らにとっては原発ができれば生活の基盤を失ってしまうのです。おばあちゃんたちのパワーがすごいです。結束した仲間がいるから28年も続けてこれたのだと思います。電力会社は、人々の分断を図り、脅したり、莫大なお金を使って取り込もうとします。

一番若い山戸孝さんは、家族を支えていくために、水産加工や、農産物の活用に知恵を絞ります。孝さんのまなざしはスウェーデンのような自然エネルギーへの転換で、持続可能な社会づくり。島民が暮らしていける農・漁業を模索する山戸青年を追います。若い人にとっても島の生活が魅力あるものでなくては、闘ってきたおばあちゃん達の願いが途絶えてしまいます。そんなことも考えられました。

先日、NHKドキュメンタリーを見ましたが、泊原発に対して泊の人たちはどう思っているのか取材していましたが、原発なしでは生活が成り立たないと答える人が多く、地元で反対し続ける人は、どれほどの重圧を感じているのだろうと思いました。だからこそ地元でない人たちの応援、支えが必要なんですね。

自主上演団体を募集しています。問い合わせはグループ現代「ミツバチの羽音と地球の回転」制作プロジェクト TEL 03-3341-2863 FAX 03-3341-2874



# ヒマラヤ 運命の山

ドイツ ヨゼフ・フィルスマイアー監督

1970年6月。標高8125mのナンガ・パルバート初登頂に成功したメスナー兄弟。4ページで紹介した「裸の山」の映画化です。

長年の夢を果たしたものの、大切な弟ギュンターを亡くしたラインホルトの苦悩と、今まで語られることのなかったこの山の登頂を巡るスキャンダルの真相を描き出します。

の真相を描き出します。

隊長のヘルリコフファーはラインホルトのチームと彼に對抗心を燃やすオーストリア軍出身のフェリックス・オーエンの2チームを競わせます。その後の展開は本の紹介に譲ります。生と死の狭間で苦しみながら生還したラインホルトの強い意志が見事です。この映画にはラインホルト・メスナー自身の協力で制作されたそうです。登攀シーンがリアルで、私までその場に放り投げられたような気持ちになり胸が高まりました。兄弟、隊長の息づまるような心の葛藤が伝わり、アイガー北壁より見応えがありました。

2012年(平成24年)1月24日

享月

日

## 初弁論来月13日

### 泊原発廃炉訴訟

#### 「めざす会」2千人超す

北海道電力泊原子力発電所(泊村)の周辺住民ら612人が、北電を相手に泊原発1〜3号機を廃炉にするよう求めた訴訟の第1回口頭弁論は、2月13日午後2時から札幌地裁で開かれる予定になった。原告団を支える「廃炉をめざす会」の会員は、昨年11月の提訴後も増え続け、昨年末現在で2051人になった。

同会は、訴状をA4判106ページの冊子にして出版。1部1200円で一般にも販売することにした。冊子では、斎藤武一原告団長(岩内町在住)が、これまで原発を容認してきた司法の責任も問い、裁判官にこそ、表に出ている問題はもちろん、隠されている問題も含め勉強してもらいたいと訴える前文を付けた。

また、市川守弘弁護士団長が、東京電力福島第一原発事故について「原発の安全性」が虚偽であったとして「政府や電力会社が『やらせ』で世論操作してきたことなどが明らかになった」と指摘。訴訟は「国策に対して市民が『ノー』を表明する手段」と記した。

原告の一人で同会共同代表の小野有五・北大名誉教授(地球環境学)は解説文で「原発を停止させて安全に廃炉への過程を進ませることが、大人の子どもに対する最も重要な責務」と書いている。問い合わせ申し込みは同会(011・594・8454)へ。

一方、北電は昨年11月の提訴を受けて、「泊原発の安全性について主張を十分に尽くし、裁判所の理解を得られるよう適切に対応した」とそのコメントを出している。(本田雅和)

## 新雪を楽しんだ手稲ネオパラ



1. 24手稲ネオパラ頂上で (撮影・岡田秀二さん)

山岳会のスキー同好会で1月24日手稲ネオパラに登りました。この日、野幌は前日からの豪雪の上に吹雪。山スキーは中止かと思ったら、手稲はだんだん晴れて、西野市民の森入り口から快適に歩き始めました。ぽっかり穴の空いている場所があり注意して通過。木立の中、急斜面はジグザグを切りながら、第3斜面、第2斜面を進むと3時間でネオパラでした。途中からは札幌の街並みが見えて高度感も味わえました。スキーは下手ですがふかふかの新雪を楽しみながら滑降しました。



ドロミテの最高峰マルモラーダ3342m

版画：福岡県田川市の伊藤久次郎さん

購読料をありがとうございます。(敬称略)  
2011.11.26~2012.1.19

## Happy New Year 2012



日本海に映る朝の影鳥海です。

写真は日本山岳会、日本山岳写真協会の会員で、鳥海山の写真集も出している酒田市の志田郁夫さん。鳥海山には四季を通じて登っています。

津村靖代(札幌市)カンパ含む 伊藤泰弘(札幌市)志田郁夫(酒田市)カンパ含む 安田成男(札幌市)カンパ含む 坂井恒俊(旭川市)蓬田三枝子(札幌市)カンパ含む 佐々木純一(雨竜町)カンパ含む 沢田正(広島市)カンパ含む 西田進(横浜市)杉本裕子(熊谷市)カンパ含む 合計37,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。領収書変わりと金額を入れていましたが不要との意見がありましたので省きました。その他に津村さんから切手、川嶋新太郎さん、福田光子さん、本城哲二さん、市川利美さんからそれぞれ、素敵なカレンダーを送って頂きました。あちこちに張って山、花、ナキウサギの写真を楽しんでいます。ありがとうございました。